
コンビニ強盗のススメ。その2

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビ二強盗のススメ。 その2

【Nコード】

N5896I

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

ついにコンビ二強盗を決行した二人。

しかし同じ頃、平成のルパンなる者が、泥棒を繰り返していた。警察に捕まることもなく、マスコミにも報道され、たちまち時の人となる。

いったい何者なのか？
その目的は、、、？

作：青木弘樹

まずは純が店内に入る。

「いらっしやいませー」

店員がむかえる。一人はレジ、もう一人は何か品出しをしていた。オーナーがいないことは、電話で確認済みだ。純は一応、帽子を深々とかぶっていた。

店内を軽くうろついてみた。客は二人。一人はエロ雑誌を読んでいる三十歳くらいの男。もう一人は二十五歳くらいの女。女のほうはかなり太っている。かごを持っているが、かごにはお菓子やらジュースやらが、たんまり入っている。

（この女、、少しはダイエットしろよ）

純は携帯電話を二台持っているので、一台をのりおに渡してあった。店の状態を見て、いけそうになったら空メールを送るのだ。

（客は二人か、、二人くらいなら、いても大丈夫かな、、？）

純はしばらく様子を見ていた。五分ほどして女がレジに向かった。いらっしやいませー」

店員が精算している。かなりの量だと見受けられる。

「、、。。が一点。。が一点、合計、、」

「あ、あとこのコロッケもふたつちょうだい」

「かしこまりましたー」

（コロッケまで食うのかよ！ふたつもかよ。つか、なんだったらひとつくれよ）

純は心の中でつつこんだ。

「以上で合計三千二百十五円になりまーす」

（そんなにかよ！どれだけ食うつもりだよ、お前は、、）

純はふたたびつつこんだ。口に出して言いたいくらいだった。そして間もなくして商品の袋詰めも終わった。

「ありがとうございますー」

女が店の出入り口に向かって歩き出す。

（よし！あの女が帰ったら、メールを送るぞ）
と、その時、

「あんだ、帰るわよ」

「ほいよ」

なんとエロ雑誌を読んでいたのは、女の旦那さんだった。

（夫婦かよ！あの女のどこに惚れたんだいったい、、）

二人は帰っていった。

（まあそんなことはどうでもいいや。よし、連絡だ！）

純はのりおに空メールを送った。

「はっ！」

外で待っていたのりおは驚いた。ついに、その時がきた。のりおは帽子にサングラス、マスクといういでたち。顔はまったく分からない。ポケットには純から預かったモデルガン。

「よし、、いくぞ」

その頃、純は品出しをしている店員をコピー機のところと呼んでいた。

「すいません、ちょっとこれ拡大コピーしたいんだけど、よく分かんなくて」

「少々お待ちください」

普通のコピーなら簡単だが、拡大や縮小は、店員もよく分からなかった。どのくらいの倍率にしたら望みどおりの大きさになるのかよく分からない。店員は手こずっていた。その時、

”バーン！”

「カネ！カネ！」

のりおが入ってきた。店員は驚いた。純も驚いたふりをし、店員にしがみついた。本当は店員をレジのほうに行かせないためだ。

レジの中の店員は、思わず手を上げた。相手は拳銃を持っているのだ。当然だろう。のりおは持っていたかばんを店員に投げつけ大声で言った。

「カネ！カネ！」

のりおは少し震えていたが、なかなかの名演技だった。店員はかばんを持ったまま、どうしていいかわからない様子だった。

「カネ！カネ！ハヤク！」

のりおは拳銃を撃つそぶりを見せた。店員は恐くなり、レジをあけ、適当にお金を入れてかばんをカウンターに置いた。

「、、、、」

のりおは無言でかばんを取り、一目散に逃げた。

「おい！警察だ！」

純のそばの店員が、レジの中の店員に言った。

「あ、ああ！」

レジの中の店員は、すぐに警察に通報。純はとりあえず残った。本当はすぐに帰りたいが、普通こういう場合残るものだ。こういう場面に遭遇した場合、警察にいろいろ話したがるのが人間というもの。だから残った。

数分して警察が来た。現場検証をし、店員や純にその時の状況をいろいろ聞いた。そして一時間ほどして警察は帰っていった。

「じゃあ俺も帰ります」

「はい。お気をつけて」

純は店員に軽く会釈をし、店を出た。その顔はニヤついていた。そう。まさに大成功だった。

そして、ここは純の家。

意気揚々と帰宅する純。待っていたのりおはそわそわしていた。

「ただいま帰りましたよ」

笑顔の純。

「おお、純君。大丈夫だったか？」

「へへ、当然じゃん。俺はただの傍観者だぜ」

「そ、そうだな、」

のりおは純が帰宅したことで、少し落ち着いた。

「で、いくらくらいあった？」

「ん？ああ、まだ見てないけど、そんなにはないだろうな」

「どれどれ、」

二人はお金を数えてみた。紙幣もあれば硬貨もある。

「四万三千七百円か」

「、、これって多いのか？少ないのか？」

のりおが聞いた。

「まあまあこんなもんじゃねえかな？コンビニ強盗は最近多いから、レジの中の金は極力少なくていいからな。たまにアホな店員が、お金を処理せず、十万くらい入ってるときもあるけどな」

「そうか、」

「さてと、このお金はおっさんにぜんぶやるよ」

「えっ？」

「いいからいいから、おっさん、お金ないんだろ？」

「いや、でも、」

「なあ、おっさん、」

純は急に真剣な表情になった。

「なんだ？」

「ちよつと話聞いてもらってもいいかな？」

「？、、いいけど、なんだ？」

「俺はな、本当はこの家に一人で住んでるんだ」

「？」

「俺の両親は、二年前までキブンヘブンでオーナーをしていたんだ。けど、」

「、、、、」

「二年前、過労で死んじまった」

「――！」

「コンビニのオーナーっていうのは大変でな、一年中休みなんて一日もない。親父が死んで、その三カ月後、おふくろも死んじまった」

「そうだったのか、、」

のりおは落着いた。そして優しい目をしていた。

「生命保険に入ってたから、お金には困らなかつたんだけど、、」

「いやけど、この家、、中古物件だったとしても、この辺の土地の値段を考えたら、二千万は超えるだろう？」

「この家は、親父が死んだ後に買ったんだ」

「?、、、どういうことだ？」

「コンビニのオーナーが過労で死ぬなんて、たまにある話でさ。中には遺族が訴訟を起こしているものもある。それを恐れたコンビニ側は、知り合いの不動産屋に頼んで、この家を俺に格安で売ったのさ。ま、口止めみたいなものさ」

「いくらだ？」

「五百万」

「五百万!？」

「最初はむかついたけど、まあ、訴えても死んだ人間は生き返らないし、しょうがないかなってな」

「そうか、、」

「けど、やっぱりくやしくてよ、なにか復讐してやりたいって思っ
て、それで、、」

「なるほどな」

「悪かったな。危ないことに巻き込んじまって」

「いや、それは別にいいんだが、だがな純君、、」

「分かってるって。コンビニ強盗なんかしても、損をするのはその
店のオーナーだって言いたいんだろ？」

「知ってたのか、、」

「けどさ、ほかに何も思いつかなかったんだ」

「そうか、」

少し沈黙が続いた。

「私の知り合いにも、むかしコンビニのオーナーをやっていたやつがいたよ」

「そうなのか？」

「だが結局ぜんぜん儲からず、今は辞めてパチンコ屋で働いているよ」

「そうか。そうさ、コンビニなんて上だけが儲かるシステムになっている。マルチ商法と同じさ」

「確かに。だがそれはどこも同じだ。自動車メーカーだろうが、銀行だろうが、芸能界だろうがな。楽しんで儲けてるのは上の連中だけだ。それが世の中だ」

「、、、、あ、あとその拳銃だけど」

「ん？」

「それな、モデルガンはモデルガンなんだけど、違法改造してあるんだ」

「そ、そうなのか？」

「普通モデルガンはBB弾を使うだろ？それはパチンコ玉を使うんだ。至近距離で撃てば多分、人も殺せる」

「、、、、」

のりおは少しあせった。

「大丈夫だよ。玉は入ってないし、入れる気もない。見た目がモデルガンよりリアルらしいから、買っただけさ」

「それならいいが、」

「ま、とにかくそういうことさ」

純は仰向けに寝転がった。

「これからどうするんだ？」

「そうだな、、出来れば、あと二、三回くらいは強盗やりたいな。なんとなく、、」

「そうか、ゝ、」

純は思った。のりおは『もうやめておけ』って言うだろうと。しかし、

「よし、やろう！」

「えっ!？」

「またやろうじゃないか。純君」

「本当に？」

「ああ。コンビニのオーナーには悪いが、もう少しだけ復讐してやろうじゃないか」

「あ、ああ。そうだな、ゝ、」

純はのりおの意外な言葉に少々戸惑った。

「しかし慎重にな。一回うまくいったからって、またうまくいくとは限らないぞ」

「そうだな。分かったよ」

おそらくのりおは純に同情したのだろう。あるいは成功の快感を覚えてしまったのか、ゝ、？

三カ月後。

この三ヶ月、純とのりおは五軒のコンビニを襲った。いずれも大成功だった。のりおは住んでいたアパートを追い出されていたので、純の家で暮らしていた。

二人はかなり仲良くなっていた。父親のいない純、息子に合わず顔のないのりお。いつしか二人は親子のような感情を持つようになっていたのかも知れない。

のりおの名演技もあってか、警察も外国人による犯罪の可能性が高いと考えていたようだった。

しかし、である。コンビニ強盗などは、言ってみれば今はよくある犯罪。純とのりおの強盗以外にもコンビニ強盗は頻繁に起こっている。

そんなものより、今警察が頭を抱えているのは、ある大泥棒の存在だった。

その犯人はここ一年で八件ほど泥棒を重ねている。いずれも裕福な家を狙っているのだが、警察が頭を抱えているのは、ほとんどその犯人の手がかりがつかめていないことだ。

正体不明、単独犯なのか？複数犯なのか？いつさい分らない。しかも犯行を行う範囲も関東から関西まで広範囲にわたる。

なにより、その犯人は犯行後『平成のルパン、参上』と書かれた名刺を残していくのだ。まるで漫画の世界のお話。マスコミも大きく取り上げ、警察の面子も丸つぶれである。

ネットの中では『かっこいい』『ファンになっちゃいそう』などと、書きたい放題だ。

そんなある日、純は週刊誌を見ていた。特集はもちろんこの平成のルパンについてである。

「へえ、面白いやつがいるもんだなあ」

夕方、純はベッドに寝転がり、アイスを食べつつ（ピノ）週刊誌を読みふけていた。

「ただいま」

そこへ、のりおが帰ってきた。のりおは職安に行っていたのだ。

「お帰り、おっさん」

「ふう、なかなか厳しいな、やつぱり」

「なあ、おっさん、これ知ってるか？『平成のルパン、また参上』だつてさ」

「ああ、もちろん知ってるさ。テレビでもよく見るしな」

「まさか現実の世界にこんなやつがいるなんてな」

「そうだな」

「けど面白いよな」

「まあな」

「それにさ、こいつのおかげでコンビ二強盗なんてケチな犯罪を警

察は適当に調べてるかも知れないし、俺らにとっちゃ好都合だよな」
「まあな。けどコンビ二強盗をやって捕まってるやつもいるぞ、新聞を見ていたら」

「なあに、そいつは無計画なやつだからさ。何事も計画的にやらないとね」

「サラ金のキャッチフレーズみたいだな」

「犯罪は計画的に」

「こらこら、、」

その頃。ここは飯島ありす（念のため書くが、本名は葉子）の住むアパート。

彼氏の佐野けんじが来ていた。けんじはソファーに座り、サンテンドーＴＳ（参天堂の、画面が三つあるポータブルゲーム機。ＴＳはトリプルスクリーンの略）で遊んでいた。

ありすは次にブログにアップする写真のコスチュームを選んでいった。

「ねえ、けんじ、最近おもしろい事件があるよね？」

「んん？もしかして平成のルパンとかほざいている変なやつのことか？」

「そう。すごいじゃん。漫画みたいでさ。しかも全然捕まってないし」

「まあな」

「けんじ、警察ならさ、情報ないの？警察だけが知っている情報とかさ」

「ん、、残念ならが、ないな。物的証拠も何もない。かなりのやり手だよ。こんなことは言いたくないけど」

「そうなんだ。ネットの中じゃある意味、英雄扱いされてたりするよね」

「ネットの書き込みなんて、いい加減なものばかりだけどな」

「ねえ、本当じゃないの？秘密の情報とか」

ありすはかわいい顔で詰め寄った。

「ん、、実をいうとな、、」

「あっ！やっぱりあるんだあ！」

「でもこのことは絶対人には言うなよ」

「うん。分かった」

「犯人については何も分かっていない。けど狙われた家にはある共通点があるんだ」

「どんな共通点？」

「どの家も、コンビ二のキブンヘブンの部長クラスの人の家なんだ」「へえ」

「だから犯人はキブンヘブンに恨みのある者の犯行じゃないかって警察内部では言われている。だからキブンヘブンの部長クラス以上の人には警戒するよう通達してるはずだよ」

「なるほど。じゃあさ、警護する家をしばったら捕まえることも出来るかもね」

「あのなあ、キブンヘブンは日本でも十本の指に入る大企業だぞ。」

部長クラスの人の家なんて日本全国にどれだけあると思ってるんだ？」

「そつかあ、てへっ」

「まったく、、そんなことよりさコスチュームなんてどうでもいいから、もっといいことしようぜ」

「もう、、けんじのエッチ」

イチヤつく二人。ありすのファンが見たら、けんじは間違いなく刺されるだろう。

さらに一ヶ月が過ぎた。

この一ヶ月、純とのりおはコンビ二強盗をしていなかった。

純は、ときどきアルバイトの求職情報誌を見ていた。のりおは毎日ではないが、職安によく通っていた。

そんな最中、テレビのニュースが流れた。

「またしても現れました。平成のルパン。なんと今回はタレントの村田桜子さんの家がターゲットにされました」

村田桜子。彼女は今、キブンヘブンのテレビCMに出ているタレント。

やはり犯人はキブンヘブンに恨みを持つものなのか、、、。謎は深まるばかりである。

その3へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896i/>

コンビニ強盗のススメ。その2

2010年10月8日15時27分発行